



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

37

フォースター

天使も踏むを恐れ
ハワーズ・エンド

荒 正人訳
小 池 滋訳

中央公論社

新集 世界の文学 37

©1973

フォークナー

訳者 西川 正 身

昭和 48 年 1 月 10 日初版印刷

昭和 48 年 1 月 20 日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社

扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

函ボール 佐賀板紙株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2 丁目 1 番地

電話(561)5921(代) 振替東京34

八月の光

目次

解説

年譜

464

454

3

八
月
の
光

道ばたに腰をおろして、荷馬車が一台、丘をのぼって
くるのを見まもりながら、リーナは思う、『あたし、アラ
バマから来たんだけど、ずいぶん遠かったわ。アラバ
マからずっと歩いて。ずいぶん遠かったわ』つづいて
旅に出てからまだひと月とたつてないのにもうミッシッ
ピー、うちからこんなに遠くまで来たのは生まれて初め
で。十二のときにドーンズ・ミルで暮らすようになって
から、こんなに遠くうちを離れたことなんか、これまで
に一度だってなかったわ

そのドーンズ・ミルへさえ、両親が元気でいたあいだ
は行ったことが一度もないのだった、もともと町へは年
に六、七回、土曜日に荷馬車で出かけて行ったもので、
町へ出かけるときは、いつもきまって通信販売で買い求
めたドレスを着、足を素足のまま馬車の床にべたりとつ
け、靴を紙にくるんで坐っている自分の脇に置いておき、
馬車がもう少しで町に着くというときになって初めて履

くのだった。大きくなってからは、父親に頼んで町の入
口のところで馬車を停めてもらい、あとは馬車を降りて
歩いて行くようにした。なぜ馬車に乗らないで歩いて町
へは行って行きたがるのか、そのわけを父親に話そうと
はしなかった。町の通りが平らででこぼこしていかないか
ら、歩道があるせいなのだろう、と父親は思った。だが
じつは、歩いていてすれ違う人びとが、自分を見て同じ
この町の者なのだな、と思ってくれるにちがいないと考
えていたからだった。

彼女が十二のとき、部屋が三部屋と玄関としかない、
網戸など一枚もない丸木造りの家の一室、虫がいっぱい
にたかる石油ランプを使い、みんながはだしで歩くもの
で裸の床がまるで古銀貨みたいにすべすべにすり減って
いる部屋で、父親と母親が同じ夏のあいだに死んだ。彼
女は無事に育った子供たちのなかでいちばん末だった。
母親がまず死んだ。彼女はいった、「父さんの世話を頼
むよ」リーナはいわれたとおりにした。やがてある日、
父親がいった、「おまえ、マキンレーといっしょにド
ーンズ・ミルへ行くんだ。支度をしておけよ、あれが来た
ら、すぐに出かけられるようにな」それから父親も死ん
だ。兄のマキンレーは荷馬車でやって来た。ふたりは、
ある日の午後、田舎の教会の裏手にある森の中に父親を

葬り、松の木で墓しるしを立てた。翌朝、彼女はマキンレーといっしょに馬車でドーンズ・ミルへと、おそらくそのときは気づかなかっただろうが、永久に、この地を立ち去った。馬車は借りもので、夕方までに返す約束を兄はしていたのだった。

兄は製材所で働いていた。村の男の連中はみんな、製材所で働くか、それと関係のある仕事に従っていた。製材所は松の木を切り出すのが仕事だった。はじめたのが七年前、あと七年もすれば、あたりの松林は一本も残らず切り尽くされてしまうだろう。そうなると、機械の一部と、機械を動かす機械のためにだけ生存していたも同然な連中の大半は、貨車に乗せられて運び去られることになる。だが、機械の一部は、新しいのがいつでも月賦で簡単に買えるので、置き去りにされてしまう——やつれはてて、大きく目を見開いた、動かぬ歯車の類が、瓦礫の山や雑然と生い茂った雑草のあいだから姿を見せているさまには、見る人を深く驚かせるものがあり、裸にされたボイラーが錆びはじめた煙突を、煙も吐かずには聳え立させているさまには、頑固で、同時に呆然と途方に暮れているところがあり、切り株であばた面になったあたりの土地は、無残にも荒廃したまま静まりかえって、鋤を入れる者も耕す者もなく、静かな秋の長雨や

凄まじい春分時の豪雨のために少しずつ決りとられ、ついにはいくつかの出口のない赤土の峡谷と化してしまう。こうしてやがて、最も栄えたときでさえ郵政省の年鑑に名前が載ることのなかったこの村は、建物を引き倒して、そいつを料理用のストーブや冬の暖炉で燃やしてしまう、遺産を食いつぶしてゆく真田虫にとりつかれた連中からも、忘れ去られてしまうのだ。

リーナがやって来たころ、その村には五所帯ほどの家族が住んでいた。鉄道線路と駅があって、一日に一回、混成列車が金切り声をあげて村を走り抜けて行く。汽車は、赤旗を出しておけば、停まることは停まるが、たいていは荒れはてた丘陵のかげからまるで亡霊のように突然姿を現わしたかと思うと、パンシーのように泣き叫びながら（パンシーは女の魔物で、家族のなかに死なないうつ、人の出ることを泣き声で予告するといふ）、糸が切れて落ち、そのまま忘れ去られたひと粒の数珠玉みたいなこの村ともいえない小さな村を、斜めに横切って通り過ぎて行く。兄は二十も年上で、いっしょに暮らすようになって、とき、リーナは昔の兄のことはほとんど覚えていなかった。兄の家は部屋が四つしかないうえに、ペンキも塗ってなく、義理の姉はたえず陣痛と子供に悩まされていて、毎年、一年のほとんど半分は、産褥についているか回復期にあるかした。その間、リーナは家事を全部引き

受け、ほかの子供たちの面倒をみるのだった。後になつて彼女は自分にいつてきかせたものだ、『それで、あたし、こんなに早く子供ができてしまったんだわ』

彼女は、家の裏手にあつて、屋根が差しかけになつてゐる部屋で寝起きしてゐた。部屋には窓が一つついてゐたが、最初のうちは一番年上の甥、一人だけだったのが、やがて二番目の甥も、最後には三番目の甥までが同じ部屋で寝起きするようになったにもかかわらず、彼女はそこの窓を暗闇のなかで音ひとつ立てずに開けてまた閉めることがいつかできるようになった。彼女が窓を初めて開けたのは、兄の家で暮らしはじめて八年たつてからのことだった。だが、十回も開けたか開けないうちに、初めてから開けてはいけなかったのだ、と悟つた。彼女は自分分（自分）にいつた、『あたしつて、よつぽど運が悪いのね』

義理の姉が兄に告げた。当然もつと早く気づかねばならなかつたのに、女房にいわれてはじめて兄は、妹の体つきの變化に目をとめた。彼は厳格な男だった。穏やかさ、やさしさ、若さ（彼はちょうど四十になつてゐた）、その他ほとんどすべてのものが、汗といつしよにしぼり出されてしまひ、残つてゐるものといつては、頑固で破れかぶれの不屈の精神とでもいふべきものと、親から譲り受けたわが家の血統に対する倅（おこ）しい誇りだけだった。

彼は、この淫売めが、と妹を罵つた。彼は相手の男を誤りなくいい当てたが（この村の若い独身者、少なくともおが屑（くず）だらけの女たらしの数は、所帯の数よりさらにいふそう少なかつたからだ）、彼女は、男がもう半年もまえにこの土地を立ち去つてゐたのに、兄の指摘を認めようとはしなかつた。ただ頑固に「あのひと、あたしを迎えにだれかをよこしてくれるわ。迎えをよこすつていつてたんですもの」と繰り返すだけで、少しも心を動かされないで、まるで羊のように無邪気なのは、女性に特有の、あの辛抱づよい確固とした貞節さから力を得てゐたからであるのだが、ルーカス・バーチといつた連中は、女のそばについていてやらねばならないことになつても、そうするつもりはいつこうにないにもかかわらず、女のそうした貞節さを頼りにし、これを信じて疑わないものなのだ。二週間後、彼女はまた例の窓から抜け出した。こんどは少しばかり骨が折れた。『まえにもこんなに大変なのだったら、いまになつてこんなことをしないで、すんだのに』と彼女は思った。昼間、表口から出て行くこともできたはずである。そうしたからとて、だれひとり止めだてはしなかつたろう。たぶん彼女にもそれがわかつてゐたことだろう。だが、彼女はわざと夜中に、それも窓から出て行くことにしたのだった。持ち物は、棕（しん）

櫛の葉の団扇と、大型のハンカチにきちんとくるんだ小さな包みだけで、その包みには、なかでも大切な三十五セントの金が五セント玉と十セント玉とで入れてあった。靴は、兄からもらい受けたお古だったが、夏のあいだは兄も彼女もはだしでとおす習慣だったから、それほど履き古されてはいなかった。足の下に埃だらけの道を感じると、靴を脱ぎ、片手に持って歩きだした。

これまでほぼ四週間、彼女はそんなふうにして旅をつづけてきたのだった。すでに背後にした、なによりもまず遠かったという思いをいだかせるその四週間は、いわば平穏な回廊で、いささかも揺るがぬ落ち着いた信念で敷きつめられ、名もない親切な人びとの顔と声とで充たされている——ルーカス・バーチ？ 知らんな。そんな名の男はひとりも知らんな、この近辺で。この道かね？ ポカホントスへ行く道さ。そのひとはそこにいるかもしれない。もしかしたら。この馬車は、途中までだが、そっちのほうへ行く。その辺まで乗っていくがいい——いまや彼女の背後に延びつづいているのは、昼から夜へ、夜から昼へといささかの狂いもなく移行く平穏な変化の長くて単調な連続であって、そのなかに彼女は、どれもこれも同じな、名もない、のろくさい荷馬車に次々と乗せてもらってここまで来たのだが、それはあたか

も車輪の軋る荷馬車と、しなやかな耳をした騾馬の一連の化身のなかを通過してきたようなもので、壺の表を永久に動いていながら、しかもいつこうに前進することのないあるものを思わせる。

馬車は彼女のいるほうへと丘をのぼってくる。一マイルほど手前で追い抜いた馬車だ。そのとき馬車は道はたに停まっていた、騾馬たちは引き革につながれたまま眠りこけ、彼女が歩いていく方向へ頭を向けていた。彼女は馬車にも気がついたし、男が二人、柵の向こうの家畜小屋のそばにしゃがみこんでいるのにも気がついた。彼女は馬車と男たちのほうに一度だけ目をやった——たった一度だけ素早く、無邪気で、奥深い、すべてを見てとる一瞥を投げた。だが、立ち止まらなかった、どうやら柵の向こうにいた男たちは、彼女が馬車や自分たちのほうに一瞥をくれたのさえ気がつかなかったらしい。彼女はまた振り返って見ることもしなかった。ほどけた靴紐を蹠のあたりに垂らしたまま、ゆっくりと歩きつづけていって見えなくなり、やがて一マイル先の丘の頂までやって来る。そこで溝のふちに腰をおろして坐り、両足を浅い溝の中に垂らし、それから靴を脱いだ。まもなく馬車の音が聞こえはじめた。しばらくのあいだは音だけが聞こえていたのが、やがて馬車が丘をのぼってくる

のが見えだした。

馬車の油が切れ、乾ききった本部と金具とがすれ合つて立てる鋭くて甲高い音は、ゆっくりとはしていても、凄まじいものがある、その一連の乾いた緩慢な破裂音は、松の木の芳しい匂いが漂う、暑いその夏の午後のしんとした静けさを破って、半マイルも離れた向こうから早くも聞こえてくる。驟馬たちは、催眠術をかけられでもしたように、少しもたゆまずに一步一步重い足を運んではいるものの、馬車はまるで進まず、赤みをおびた糸のように見える道路の上に落ちた薄汚ない一個の数珠玉でもあるように、中景にいつまでもいつまでも吊り下げられたままになっているように見える、馬車の動きはそれほど無限に遅いのだ。その遅いことは、目をこらして見つめていると、いつか馬車の姿が見えなくなってしまうほどだが、それはちょうど視覚と感覚とがうとうとして、道路そのものと同様、すでに長さの計つてある糸を糸巻に巻き戻すように、昼と夜のあの平穩で單調なすべての繰り返しと溶けあいまじりあつてしまふのと同じだ。こうして最後に馬車の音は、距離をさえ越えた、どこかとるに足りない、まるで重要でない地域からゆっくりと、凄まじく、何の意味もなく聞こえてくるような気がして、あるいは幽霊がその実体よりも半マイル先に立

つて歩いているのではないかと、そんなふうに思えてくる。『あんなに遠くなのに、音だけはもう聞こえてくるわ、姿はまだ見えないのに』とリーナは心に思う。彼女はまたもや馬車に乗せてもらつて、はやくも動きだしている自分を想像して考えつづける。そうすると、まるであたしは、あの馬車に乗りもしないうちに、馬車があたしが待つてゐるこゝまで来もしないうちに、もう半マイルも乗つたようなことになるわけだわ、そしてあの馬車は、あたしをまた降ろしてからでも、やっぱりあたしを乗せたまま半マイル行くことになるわけだわ。いまはもう馬車を見まもることもしないで彼女は待つが、そのあいだにも彼女の思いはぼんやりと素早く滑らかに走りつづけ、名も知らぬ親切な人びとの顔や声を次々と思ひ浮かべる——ルーカス・パーチ？ あんた、ボカホントスへも行ってみたつていうんだね？ この道かね？ スプリングヴェールへ行く道さ。あんた、こゝで待つてゐるがいい。そのうちに馬車が通りかかるから、そいつの行く先まで乗せてつてもらうんだな。彼女の思いはつづく、『それでもあの馬車がジェファソン（作者が設定したミシシッピ州北部の架空の町）までずつと行つてくれるようだったら、ルーカス・パーチは、あたしが来たことを目で見るまえに耳で聞くことになるわけだわ。でも、馬車の音は聞いても、あたしが

こんな体になったことはわからないはずよ。だから、あたしを見るまでは、あのひとの聞くのは一人だけ。それからあのひととはあたしを見て、とっても喜ぶわ。だからあのひと、思い出さないうちに、あたしと子供の二人を見ることになるんだわ』

アームステッドとウィンターボトムは、ウィンターボトムの家畜小屋の日陰になった壁を背にしやがみこんでいて、彼女が前の道を通り過ぎて行くのに気がついた。若くて、みごもって、この土地の者でないのをすぐに見てとった。「あの女、どこであんな腹になったのかな」とウィンターボトムがいった。

「あんな腹をかかえて、どこから歩いてやって来たのかな」とアームステッドがいった。

「この道の手前のだれかを訪ねて来たんだらうよ」とウィンターボトム。

「そうじゃあるめえよ。そんなら、おれの耳にへえってるはずだ。といって、この先のおれんちのほうでもねえ。もしそうなら、やっぱしおれの耳にへえってるはずだ」「自分の行く先をちゃんと知ってるらしいな」とウィンターボトム。「そんなふうな歩きつぶりだぜ」

「あの女、そう遠くまで行かねえうちに、とんだ道連れ

ができるこったらうよ」とアームステッドはいった。女は、だれの目にもそれとわかる、ふくれ上がった腹を重そうにかかえながら、ゆっくりと通り過ぎて行った。色褪せた青色の服を不様に着、手には棕櫚しゅろの葉の団扇うちわと小さな布包みを持ち、通り過ぎながら、ちらりと男たちのほうを見やったが、ふたりともそれには気がつかなかった。「この近くから来たんじゃないか」とアームステッドがいった。「あの歩きつぶりからすると、もうだいてくつてきたようだし、これからまだいぶ先まで行かなきゃならねえようだな」

「だれかこの辺のやつを訪ねて来たにちがいねえ」とウィンターボトム。

「そんなら、おれの耳にへえってるはずだが」とアームステッドはいった。女は歩きつづける。一度も後ろを振り返らない。やがて道の向こうに見えなくなる——ふくれ上がった腹をかかえ、のろのろと、ゆっくりと、急がずに、ただ一途に歩きつづけるその姿は、しだいに閑たけてゆく午後そのものを思わせる。歩きつづけて行く彼女は、やがてふたりの話題からも消えた、おそらく頭のなかからも消えてしまったことだらう。というのも、しばらくすると、アームステッドがここにやって来た物件を口にしたからだ。彼はこれまでに五マイル離れたわ

が家から自分の荷馬車に乗って二度までもやって来て、そのたびにウィンターボトムの家畜小屋の日陰になった壁のところ、三時間もしやがみこみながら、こうした連中の常だが、時間のたつのもかまわずに悠々とかまえ、唾を吐いたり遠回しのことばかりいつていて、用件は持ち出せないでいた。その用件というのは、ウィンターボトムが中耕機を売りがっているので、値段をつけてみることにあった。やがてアームステッドは太陽を見上げてから、三晩前に寢床のなかで考えて決めた値段を口に出してみた。「この値段なら、ジェファソンにも一台買えるのがあるんだがな」と彼はいった。

「そんなら、そいつを買ったらいだらう」とウィンターボトム。「どうやら買い得らしいじゃねえか」

「そうともよ」とアームステッドはいった。そして唾を吐き、ふたたび太陽を見上げ、それから立ち上がった。「さて、ぼつぼつ帰るとするか」

彼は馬車に乗り込み、騾馬を起こした。というよりは、騾馬を動かしたはじめたといったほうがいい。騾馬が眠っているのか、それとも目を覚ましているのか、黒人であることはわからないからだ。ウィンターボトムは柵のところまでついてきて、両腕をいちばん上の横木にのせた。「そうともよ」と彼はいった。「そんな値段なら、おれだ

ったらすぐにも買ってしまうがな。おめえが買わねえなら、それこそおれが買ってしまうぜ、そんな安値ならな。そいつをもつて男、まさか騾馬をひと番、五ドルぐらいで売ろうてんじゃねえだらうな？」

「そうともよ」とアームステッドはいった。騾馬が歩きだし、馬車はふたたび例の甲高い音を半マイルも先のほうまで鳴りひびかせながら、ゆっくりと動きはじめた。彼もまた後ろを振り返って見ない。といって、前方に目をやっているわけでもないらしく、馬車が丘の頂近くまで来たときになって、やっと彼は道ばたの溝に腰をおろして坐っている女に気づくのだ。彼が青いドレスからあの女だと認めた瞬間、はたして女がこの馬車をまえに見ているのかいないのか、彼には見当がつかない。一方、彼がまえにこの女をちらと見やったことがあろうとは、これまただれにもわからなかったことだろう、男も女も前進しているふうには少しも見えないにもかかわらず、馬車が凄まじい音を立てながら、そのゆっくりと放つ触れれば触れられそうな眠気と赤い土埃のなかを女のほうへと這い進むにつれて、両者の間隔はゆっくりとちぢまってゆく、その眠気と土埃のなかを、騾馬は、引き具が立てる間遠な金属音と、野兎に似たその耳のしなやかな揺れ動きとで一定のリズムを刻みながら、夢みるように

一步一步重い足を運びつづける、驛馬が眠っているのか目を覚ましているのか、依然として判然としないうちに男は驛馬を停める。

石鹼を使ってふつうに洗ったためばかりでなく、いまでは雨風のためにも色がさめてしまった青い日除け帽の下から、彼女は物静かに、愛想よく彼を見上げる――

若くて、顔の感じのいい、率直で、機敏そうな女。彼女はまだ動かない。帽子と同じく雨風のために色褪せた服でつんだ体は、不恰好で、少しも動きを見せない。団扇うちわと包みみそを膝の上にのせている。靴下ははいっていない。浅い溝みぞの中に揃そろえて垂らしているむき出しの足は、そのそばに置いてある、男物らしい、埃にまみれた重い靴以上に、じっとして動かない。停まった馬車の上では、目の白っぽくなったアームステッドが背をかかめている。団扇のへりが日除け帽やドレスと同じように色褪せてしまった青できれいに縁取られているのを見てとる。

「どこらまで行くんだね？」と彼はいう。

「暗くならないうちに、もう少し先まで行っておこうと思つたの」と彼女はいう。立ち上がった靴を手にする。ゆつくりと慎重に道路に上がり、馬車へ近づく。アームステッドは、降りて手を貸してやろうともしない。た

だ驛馬が動きださないように押えているだけで、そのあいだに女は重い体で車輪をまたぎ越えて乗り込み、靴を座席の下に置く。それから馬車が動きだす。「ありがとうございます」と彼女はいう。「歩くつて、ほんとにくたびれるものね」

アームステッドはまだ一度も女をまともに見た様子がない。にもかかわらず、女が結婚の指輪をはめているのを見てとっているのだ。彼はもう女を見やらない。ふたたび馬車は例の甲高い音を立てながらゆつくりと動きつづける。「あんた、どこから来たんだね？」と彼はいう。

彼女はほっと息を吐き出す。溜息ためいきというよりも、静かな驚きの、とでもいったらいい息を、静かに吐き出す。「ずいぶん遠くからのような気がするわ、いまになつてみると。アラバマからなの」

「アラバマから？ そんな体で？ うちのひとはどこに

いるんだね？」

彼女もまた男のほうを見ない。「あたし、この先のほうで会えるだろうと思つてるの。あんた、知ってるかもしれないわね。ルーカス・バーチっていうの。ここに来る少し手前のところで聞いたのだけど、ジェファソンの製板工場で働いてるんですって」

「ルーカス・バーチね」アームステッドの語調は彼女のとほとんど変わらない。ふたりはスプリングが壊れてへこんだ座席に並んで坐っている。膝にのせた両手と日除け帽の下で横顔を見てとることができ、彼は目の端でその横顔を見る。彼女は二頭の驟馬のしなやかな耳のあいだに延びつづいている前方の道を見つめているらしい。「で、そのひとをたずねて、たったひとりで、ずっとここまで歩いてきたってわけなんだね？」

彼女はほんのしばらく答えない。やがていう——「みんな親切にしてくれたわ。ほんとに親切にしてくれたわ」

「女の連中もかね？」目の端で女の横顔を見まもりながら、彼は考える。マーサのやつ、何をいい出すかわかったもんじゃないぞ。つづいて、『いや、マーサが何をいい出すか、おれにはよくわかつてる。女ってやつは、身持がいいと、どうやらそれほど親切にはなれんらしい。その点、男は違うようだ。親切にしてやらねばならん女に本気で親切にしてやれるのは、どうやら当の自分も身持の悪い女にかぎるらしい』つづいて、そうともよ。マーサのやつが何をいい出すか、おれにはちゃんとわかっている。

女はやや前かがみになったまま、じっとして動かない、

横顔も、頬も動かない。「不思議だわね」という。

「あんたみたいな見も知らない若い女がそんな体で道を歩いているのを見ただけで、男に逃げられたんだなど、よくわかるもんだっていうのかね？」彼女は動かない。

いまや馬車は一種のリズムを刻み、酷使されて油の切れた木部は、遅々とした午後、道路、暑さと一つものになる。「で、そこまで行けば、見つかると思ってるんだね」

彼女は動かない、二頭の驟馬の耳のあいだから、のろのろ進む道路を、おそらく道また道の彼方にあるであろう自分の行き先をじっと見つめているらしい。「見つかると思うわ。むずかしくはないわ、きっと。たぶん大勢人が集まるところにいるわ、みんなが笑ったり冗談をいいたたりしてるところに。あのひと、昔からそんなところが得意だったから」

アームステッドはふんと鼻を鳴らす、荒々しい、そっけない音だ。「さっさと歩くんだ、この驟馬どもめ」と彼はいい、それから、思考ともつぶやきともつかずに自分に向かつていう——『きつと見つけたすこつたらうな。その男、アーカンソーまで、いや、テキサスまで逃げればいいものを、手前のこの辺まででやめたのは、とんだ大しくじりだったと思ひ知るこつたらうて』

太陽はすでに地平線上に傾き、あと一時間もすると、

夏の夜が速やかに訪れる。小路が街道から折れ曲がって
いて、街道よりもおおいそう静かだ。「さあ、着いた
ぞ」とアームステッドがいう。

女はすぐに動きはじめ。手を差し延べて靴をとる、
靴を履くわずかなあいだでも、馬車を引き止めておきた
くはないといったふうだ。「ほんとにありがとう」とい
う。「助かったわ」

馬車がふたたび停まる。女は降りる用意をする。「あ
なた、日が暮れないうちにヴァーナーの店まで行けたに
したって、ジェファソンまではその先まだ十二マイルも
あるんだぜ」とアームステッドはいう。

彼女は靴と包みと団扇うちわをぎこちなく片手に持ち、いま
一方の手は降りるときに体を支えようと何も持たずにあ
けてある。「でも、あたし、やっぱり行くわ」という。

アームステッドは彼女に手を触れない。「あんた、
今夜はうちに来て泊まんなよ」と彼はいう、「うちへ来
れば女どもが——女がきつと……もしもあんたが——さ
あ、来るがいい。朝になったら、何よりもさきにヴァー
ナーの店まで送ってやるから、そこからまた乗せてもら
ってジェファソンへ行ったらいいだろう。だれか町へ行
く者がいるさ、土曜だから。あんたの男、あんたをおい
て今晚じゅうに逃げ出すってこともあるまい。いまたし

かにジェファソンにいるというんなら、明日だっている
だろうよ」

彼女は持ち物を全部一方の手に持って降りる用意をし
ながら、じつと坐ったまま動かない。斜めに落ちる影で
縞模様になった街道が、カーブを描きながら遠く延びつ
づいている前方を見つめている。「まだあと四、五日は
心配ないと思うけど」

「そうともよ。まだ時間はたっぷりあるとも。ただな、
とんでもない道連れが、歩くことのできない道連れがい
つなんどきできるかもしれないからな。さあ、いっしょに
うちへ来るがいい」彼は返事を待たずに驃馬ちうばを歩き出さ
せる。馬車は小路に、薄暗い道にはいる。女はなおも団
扇と包みと靴を片手にしたまま、坐りなおす。

「あたし、迷惑はかけないようにするわ」という。「面
倒はかけないわ」

「いいってことよ」とアームステッドはいう。「さあ、
いっしょに来な」驃馬ちうばは初めて自分からとつと歩き出
す。「とうもろこしの匂いをかぎつけやがったな」とア
ームステッドはいい、心に思う、『だがな、そこが女
というもんなんだ。同じ仲間の女が悪さをすると、待っ
てましたとばかり手厳しくやつつけるくせに、いざ自分
の場合になると、臆面もなく天下の往来を平気な面をし